

「ウナギ文」の分析

— 連結メトニミーとして —

山本 幸一

キーワード ウナギ文、名詞述語文、連結メトニミー、対象の拡張、意味の二重構造

1 はじめに

かつて、哲学者森有正が「日本語は、文法的言語、すなわちそれ自体の中に自己を組織する原理をもっている言語ではない」と述べたが、川本（1976）はこの言葉は「日本語は非論理的な言語である」と主張しているような誤解を受けているとし、その真意は、日本語の文構造が言語的・非言語的文脈に依存することが大きく、その種の文が頻繁に出現するということであろうと述べている。この森が挙げている文例に「ほくはさかなです」がある。この一見非論理的な文は、日本語文法で「ウナギ文」と呼ばれてきた。「ほくはウナギだ」という文例そのものは、金田一（1955）が最初に使用したようであるが、「ウナギ文」が広く知れ渡ったのは、書名に「ウナギ文」を冠した奥津（1978）がきっかけである。これまで「ウナギ文」については様々な角度から論じられているが、議論の流れは構文の問題から文脈に関連した語用論の問題へと推移してきている。本稿では、この「ウナギ文」について、先行研究の分析の問題点を検討した上で、連結メトニミーとしての分析を提案する。

2 ウナギ文

「AはBだ」のような名詞述語文におけるAとBについて、まず思い浮かぶ意味的關係は「同一関係」、「包含関係」である。しかし(1)–(3)の文はこのいずれにも属さず、例えば「 」内で示したように、AとBが通常何らかの「近接関係」を示すことになる。このような文が一般的に「ウナギ文」と呼ばれているが、本稿もこれに倣うことにする。

- (1) ぼくはうなぎだ。 「ぼくはうなぎを注文する。」
 (2) 娘は男の子だ。 「娘の生んだ赤ん坊は男の子だ。」
 (3) 彼女はフランス語だ。 「彼女が選択した外国語はフランス語だ。」

ウナギ文は日本語特有の現象として、主に日本語の問題として分析がされているが、実際には外国語にも見られるものである。この点についてはいろいろと指摘があるが、例えば池上（2000）は、ウナギ文が日本語特有の現象ではなく、対応する表現が英語にも存在するとして、次のように述べている。

注文の品を運んで来たウェイトレスが、どちらが何を注文したのか、テーブルのところで少しためらう瞬間があった。その時、グリーンバウム教授の発したことが「Im fish」であったのである。実は筆者にとっては、この種の言い方を意識して耳にしたというのはこれが初めてのことであった。しかも、それが事もあろうに現代英語文法の権威とされている人が口にするのを聞いたというのが、ひどく嬉しく感じられた。(P30-31)

3 先行研究におけるウナギ文

ウナギ文については様々な分析が提案されているが、本稿では、大きく次の3つの説に分類して考えることにする。

- a. 基底文から変形されたのがウナギ文である。
- b. 基底文から省略（縮約）されたのがウナギ文である。
- c. ある意味内容がウナギ文によって表現される。

以上のa、b、cを、「変形説」、「省略説」、「表現説」として、代表的な分析を眺めた後、それらの分析の問題点を取り上げることにする。

3-1 変形説

変形説としては、詳しい分析がなされている奥津（1978）の「ダによる述語代用説」と北原（1981）の「分裂文説」がある。

3-1-1 ダによる述語代用説（奥津（1978））

「だ」が動詞、形容詞などの述語を代用するという分析であり、変形過程は(4)

のようである。

- (4)(a) ぼくはウナギを食べる
- (b) ぼくはウナギをだ。
- (c) ぼくはウナギだ。

3-1-2 分裂文説 (北原 (1981))

分裂文から派生されるという分析であり、変形過程は(5)のようである。

- (5)(a) ぼくがウナギを食べたい。
- (b) ぼくが食べたいのはウナギだ。
- (c) ぼくののはウナギだ。
- (d) ぼくのはウナギだ。
- (e) ぼくはウナギだ。

3-2 省略説

川本 (1976) はウナギ文は次のような省略過程によって得られるとしている。

- (6)(a) ぼくの(あれが)ウナギだ。
- (b) ぼくは(あれが)ウナギだ。
- (c) ぼくはウナギだ。

最終的には表現されない「あれが」は、言語外の文脈によって具体化されるとしている。同様に、堀川 (1983) も次のような省略過程を提案している。

- (7)(a) 僕の注文はウナギだ。
- (b) 僕はウナギだ。

ここで述べている、ウナギ文における「省略」とは、「文レベルの省略」であり、文を構成している成分が省略されて文の形が変わる場合である。

3-3 表現説

文脈に依存した推論から解釈されるとする「語用論的分析」には池上 (1981)、高本 (1995)、(1996) があり、「メトニミーによる分析」にはフォコニエ (1994)、菅井 (2003) と、参照点能力による分析の山梨 (2000) がある。

3-3-1 語用論的分析

池上は、「同一関係」、「包含関係」、「ウナギ文」のいずれの「YはXだ」構文も「近接関係」を表すとしている。近接関係をWITH、存在をBEと表示すると、「Y BE WITH X」のような構造を持つとして、「ウナギ文」において、YとXの両者がどのような関係にあるかは文脈に委ねられるとしている。

高本は、「AはBだ」形式の発話について、AとBが「同一関係」や「包含関係」にあるデフォルト解釈がキャンセルされる時、この発話が有効なものとなるために、AとBとの間の二項関係Rについて文脈的推論が必要である、としている。

3-3-2 メトニミーによる分析

ウナギ文をメトニミーとする説明を見てみよう。例えばメトニミーである(8)が「注文料理と注文客」という転義であるように、ウナギ文である(9)も同様に「注文料理と注文客」という隣接性による転義であるとする分析である。

- | | |
|--------------------------|------------|
| (8) <u>カツドン</u> が食い逃げした。 | 「注文料理→注文客」 |
| (9) <u>ぼく</u> はウナギだ。 | 「注文客→注文料理」 |

4 先行研究の問題点

3節で見た先行研究のうち、本稿は「表現説」の「メトニミーによる分析」の立場を取ることになるが、メトニミーについては、異なった定義をすることになる。先行研究の問題点についての詳細な検討は紙幅の関係から許されないため、各説全体として問題点を扱うことにする。

4-1 「変形説」、「省略説」及び「表現説」の中の「語用論的分析」の問題点

「変形説」、「省略説」については、以下A-Dの4つの問題点を挙げ、「表現説」の中の「語用論的分析」の高本の分析については、CとD、また池上の分析については、Dが問題点として挙げられる。

A

基底文からの変形・省略で説明がされる場合、2つの異なった文型を結びつけることに問題がある。(10)(11)では、「述語が明確に示された文」と「『～は--が....だ』の文」それぞれと「ウナギ文」との違いが示されているが、形式が異な

る2文型は意味が異なるため、想定されるウナギ文の基底文とウナギ文が必ずしも同じ文脈で交替可能とは限らない。つまり、両者を省略・変形で結びつけることはできないことを示している。

- (10) ウェイター：ご注文はどういたしましょう？
 客：私はうな丼を頂きます。／??私はうな丼です。
 (11) 客A：君は何を注文する？
 客B：??私は注文がうな丼だ。／私はうな丼だ。

B

ウナギ文に対応する次のような外国語が見つかることから、ウナギ文を日本語特有の現象として説明するべきではない。

- (12) I'm coffee. (小島 (1988))
 (13) Vous êtes golf. 「君はゴルフだ」 (小池 (1994))
 (14) 我是北京、他是上海。 「私は北京で、彼は上海だ」 (小池 (1994))

C

「同一関係」、「包含関係」を示す名詞述語文と「ウナギ文」とは同一形式である。同一形式である以上、何らかの意味の共通性があるはずであるが、その点が明らかにされていない。

D

「同一関係」、「包含関係」を示さない「名詞述語文」に分析が限定されているが、一見非論理的と考えられる点では同様な性質を持つにもかかわらず、(15)(16)のような「AがBする」、「AをBする」という文を含めた説明が考慮されていない。

- (15) 風車が回っている。 「風車の羽根が回っている。」
 (16) 頭を刈る。 「頭の髪を刈る。」

4-2 「表現説」の中の「メトニミーによる分析」の問題点

4-1で取りあげた4点は「メトニミーによる分析」には問題とはならないので、ここでは、メトニミーによる分析に対する問題点を2点挙げる。第1点目として、西山(2003)のメトニミー分析に対する反論がある。「一般性の欠

5 メトニミー

本稿ではメトニミーによるウナギ文分析を行う。ただし、メトニミーの概念を先行研究とは異なった形で用いるため、本稿で考えるメトニミーの概念についての議論から始めることにする。

5-1 メトニミーの二種類

メトニミーは従来「隣接性 (contiguity) による転義」とされている。「文字通りの意味 (literal meaning)」をソース、「意図された意味 (intended meaning)」をターゲットと呼び、転義の過程を「ソース→ターゲット」と示せば、メトニミーは次のように表すことができる。

(2) そこへは車で行こう。 [車 → 自動車]

ところが、従来メトニミーと分析されている表現をよく見ると一枚岩ではなく、認知メカニズムの異なる2つのタイプから成っていることがわかる。(23)と(24)のメトニミーについて見てみよう。

(23) 長髪がやって来る。 [部分→全体]

「長髪」→「長髪の人間」

(24) 風車が回っている。 [全体→部分]

「風車」→「風車の羽根」

(23)と違って、(24)の意味転移をよく見ると、[]に示されている程単純ではないことがわかる。確かに、回っているのは「羽根」であることは違いないが、例えば、次に見るように、代名詞の照応において、(26)は(25)と異なった振る舞いをするからである。

(25) 長髪がやって来る。

*それ(長髪)は実に長い。

彼(青年)は実に背が高い

(26) 風車が回っている。

それ(風車)は、オランダ製だ。

*それら(羽根)は、4枚ある。

代名詞の照応関係において、(25)がターゲットと照応するのに対して、(26)はソー

スと照応し、異なった振る舞いをしている。代名詞の照応に加えて、「数の一致」、「ターゲットを主語とした叙述の後続の可能性」でも両者の違いを示すことができる。

「数の一致」

⑫のタイプ 「注文」→「客」

「注文（複数）、客（単数）」の場合、客（ターゲット）に数が一致する。

⑫(a) *Those french fries are getting impatient.

(b) That french fries is getting impatient.

⑬のタイプ 「運転手」→「自動車」

「運転手（単数）、自動車（複数）」の場合、運転手（ソース）に数が一致する。

⑬(a) I am parked out back.

(b) *I are parked out back.

「ターゲットを主語とした叙述の後続の可能性」

⑫のタイプでは可能であるのに対して、⑬のタイプでは不可能である。

⑬(a) I am parked out back and have been waiting for 15 minutes

(b) *I am parked out back and may not start.

(⑬Nunberg 1995)

以上から、⑫のタイプがターゲットを指し示しているのに対して、⑬のタイプはソースを指し示していることが分かる。この分析から、本稿では、従来同列に扱われているメトニミーの諸型について、⑫のタイプと⑬のタイプとに分けることにする。⑫のタイプは、ソースからターゲットに意味が転移し、ソースがターゲットの特徴となって、ターゲットを指示している。このため、⑫のタイプを、以降「特徴づけメトニミー」と呼ぶことにする。他方、⑬のタイプは、述語との関わりにおいてのみターゲットの意味が立ち現れ、ターゲットの介在によって、ソースと述語が連結される。このため、⑬のタイプを以降「連結メトニミー」と呼ぶことにする。前者の典型例は、「特徴」が関係する[部分→全体]の型であり、後者の典型例は、「連結」が関係する[全体→部分]の型であると考えられる。「特徴づけメトニミー」と「連結メトニミー」の認知メカニズムを次に整理してみる。

5-2 2種類のメトニミーとその認知メカニズム

A 特徴づけメトニミー： 典型例は「部分→全体」 例：㉔長髪がやって来る。		
語（句）のレベル（対象の指示過程） （ソースが地、ターゲットが図）	ソース→ターゲット	（長髪→青年）
節のレベル（指示対象＝述語と関わる対象）	ターゲット	（青年）
B 連結メトニミー： 典型例は「全体→部分」 例：㉕風車が回っている。		
語（句）のレベル（対象の指示過程）	ソース	（風車）
節のレベル（指示対象）	ソース	（風車）
	↓↑	↓↑
（述語と関わる対象）	ターゲット	（羽根）
意味の二重構造（ソースとターゲット間を「図」が往復する）		

特徴づけメトニミーのソースとターゲット間の「地」と「図」の関係は「対象の指示過程」において生起する。他方、連結メトニミーのソースとターゲット間の「図」の往復は、「対象と述語との関わり」において生起する。この「図」の往復を「意味の二重構造」と呼ぶことにする。メトニミーの2つのタイプのうちの1つであるこの連結メトニミーには、Langacker (1990) の主張する「プロファイルと活性領域の不一致 (Profile Active-Zone Discrepancy)」が関与していると考えられる。

プロファイル：言語使用者が特に注目をする際立ちの大きい部分であり、言語表現が直接指し示す部分。

アクティブゾーン：言語表現に表されている「関係」に直接関わる部分。

㉔ David blinked. (Langacker 1990)

連結メトニミーである㉔の例では、プロファイルは“David”であるが、アクティブゾーンは“eyelids (まぶた)”であり、両者に不一致がある。

5-3 連結メトニミーの型

これまで、㉔の[全体→部分]の型のみを見てきたが、連結メトニミーには他の型も見つかる。代名詞の照応関係において、ソースと照応することから、次の[主体→付属物]、[支配者→支配対象]が挙げられる。

- (31) 机を片づけなさい。 [主体→付属物]
 それ(机)は、立派なものだ。
 *それら(机上に散らかったもの)は、捨てるべきだ。
- (32) ブッシュがイラクを爆撃した。 [支配者→支配対象]
 彼は(ブッシュ大統領)は、議会で十分な説明が必要であろう。
 *それ(米軍)は、短時間でイラク軍に大打撃を与えた。

5-4 「対象の拡張」と連結メトニミー

「ある対象」が、「別の対象」を「部分」として包含し、機能的に一体化して、「全体」と捉えられることを「対象の拡張」と呼ぶことにする。「主体→付属物」、「支配者→被支配者」というメトニミーの型におけるソースとターゲットに「対象の拡張」が働くと考えることによって、これらの型を、「全体→部分」の型のメタファー的拡張として、並行して連結メトニミーとして捉えられる。〈 〉を一体化した全体、内部の《 》を包含される部分と考え、(拡張された)全体を〈全体《部分》〉と表示してみる。

	型	ソース	→ターゲット
(33)	[全体 →部分]	〈全体《部分》〉	→部分
(34)	[主体 →付属物]	〈主体《付属物》〉	→付属物
(35)	[支配者→被支配者]	〈支配者《被支配者》〉	→被支配者

尚、〈 〉内、つまり一体化した全体として「図」と捉えられるのは、「主体」、「支配者」であり、部分としての「付属物」「被支配者」は「述語との関わり」において初めて「図」として立ち表れる。既にみた(26)と対照しながら、それぞれの連結メトニミーにおける意味の二重構造について見てみることにする。

- (36) 風車が回っている。
 言語表現としての伝達内容は、「全体」としての「風車」の稼働である。しかし、述語「回る」と直接関係するのは「部分」である「羽根」である。
- (37) 机を片づけなさい。
 言語表現としての伝達内容は、〈主体《付属物》〉としての〈机《机上の物》〉の整頓された状態である。しかし、述語「片づける」と直接関係するのは「机上の物」である。
- (38) ブッシュがイラクを攻撃した。
 言語表現としての伝達内容は〈支配者《被支配者》〉としての〈大統領

領《軍隊》に帰する責任である。この場合の責任は大統領と軍隊の連帯責任ではなく、軍隊への支配力を有する大統領に所在している。他方、述語「攻撃する」と直接関係するのは「軍隊」である。

以上見たことから、連結メトニミーの意味の二重構造については次のようにまとめることができる。

言語表現としての伝達内容は、(拡張された)対象「全体」に関する稼働、状況、責任等の叙述である。しかし、述語と直接関係するのは「部分」である。

6 メトニミーとしてのウナギ文分析

6-1 連結メトニミーとしてのウナギ文

2節では「AはBだ」の名詞述語文におけるAとBの意味的關係が「同一関係」でも「包含関係」でもなく、何らかの「近接関係」を示す場合をウナギ文と呼ぶことにした。AとBの意味的關係が「近接関係」というのは、直接的関係ではなく、間接的關係を示しており、主語と述部の名詞とが何らかの意味的な介在、つまり連結部分を通して結びついていると考えられる。この「意味的な連結部分」を(39)–(41)のウナギ文で明示すれば、< >のようになる。「」内は「主語<意味的な連結部分>述部名詞」である。

- (39) ぼくはうなぎだ。 「ぼく<注文料理>うなぎ」
 (40) 娘は男の子だ。 「娘<生まれた赤ん坊>男の子」
 (41) 彼女はフランス語だ。 「彼女<選択した外国語>フランス語」

5節では述語との関わりにおいてのみ意味が立ち表れるターゲットの介在によって、ソースと述語が連結されるタイプのメトニミーを「連結メトニミー」と定義した。「意味的な連結部分」という点に関しては、ウナギ文も「連結メトニミー」と同様に考えることができる。また、代名詞の照応においても、西山(2003)が挙げている例として既に見た(42)のように、ソースと照応している。

- (42)(=19)(a)甲：花子さんが遅れてくるそうだが、彼女のために注文しておいてあげよう。花子さんは何だろう。天井かな。

「注文客→注文料理」

(b)乙：花子さん、ああ、彼女は、ウナギだよ。

(c)丙：？花子さん、ああ、それは、ウナギだよ。

ウナギ文の場合は「主語」である「主体」と「述部名詞」の間には、両者を介在する「関連概念」が存在しているので、「連結メトニミー」の例である(43)と同様に、ウナギ文の例(44)を次のように表すことができる。

(43) 風車が回っている。 [全体 →部分]

(44) ぼくはうなぎだ。 [主体 →関連概念]

述語との関わりにおいて、主語に関係する意味が立ち現れる点では(43)と(44)は同じである。しかし、「風車と羽根」という関係は、「風車」に本来的に備わっている「全体と部分」という関係であるのに対して、「ぼくと注文」という関係は、人間である「ぼく」に本来的に備わっている関係ではない。この点に関しては、ウナギ文により近いのは(45)の例である。

(45) 机を片づけなさい。

[主体 →付属物] < 主体 《付属物》> →付属物

(45)においては、「机」と「机上の物」は、「机」に本来的に備わっている「全体と部分」という関係ではなく、「ある対象が、別の対象を部分として包含し、機能的に一体化して全体と捉えられる」という「対象の拡張」によって包含されると考えた。ウナギ文における「主体と関連概念」についても、連結メトニミーと同様に次のように捉えることができる。

ソース →ターゲット

(46) ブッシュがイラクを攻撃した。

[支配者→被支配者] < 支配者 《被支配者》> →被支配者

(47) ぼくはうなぎだ。

(48) 娘は男の子だ。

(49) 彼女はフランス語だ。

[主体→関連概念] < 主体 《関連概念》> →関連概念

(47)–(49)において「主体」が「関連概念」を包含して、「対象の拡張」が働くと考

えることによって、ウナギ文を、連結メトニミーとして捉えることができる。この場合、その二重構造は次のようにまとめることができる。

言語表現としての伝達内容は、(拡張された) 対象「全体」と「述部名詞」との「対応関係」の叙述である。しかし、述語と直接関係するのは「部分」としての「関連概念」である。

以上見たように、ウナギ文が連結メトニミーであり意味の二重構造が生じ、ウナギ文の言語表現としての伝達内容が、XとYの「対応関係」(拡張された「対象全体」をX、「述部名詞」をYとする)の叙述であるという本稿の主張が正しいとすれば、複数の対応が想定される文脈でウナギ文が容認され易い言語事実が自然に説明できる。なぜならXとYの1つの対応しか想定されなく対比色のない文脈では、XとYの「対応」に顕著さが生じなく「対応関係」の叙述は動機づけられない。他方、複数のX^aとY^aの対応が想定される文脈では、XとYの「対応」に顕著さが生じ、「対応関係」の叙述が動機づけられる。(50)には対比色がなく、(51)には対比色がある。従って「対応」に顕著さの生じない(50)では「対応関係」の叙述は容認され難く、「対応」に顕著さの生じる(51)では「対応関係」の叙述は容認され易い。

- (50)(=10) ウェイター：ご注文はどういたしましょう？
 客：私ほうな井を頂きます。／？？私ほうな井です。
 (51)(=21) ウェイター：ご注文はどういたしましょう？
 客A：私ほうな井だ。
 客B：ほくは天井だ。

また、(52)は(50)と同じくウェイターと客だけの対話であり、対比色がないものの、ウェイターの質問が「客」と「何(=注文)」の対応関係を求めているため、「対応」に顕著さが生じており、ウナギ文は容認される。

- (52) ウェイター：お客様は何をご注文でしたか？
 客：私ほうな井です。

6-2 名詞述語文「AはBだ」について

「AはBだ」のような名詞述語文におけるAとBの意味的關係は「同一關係」、「包含關係」及び、本稿の主張である、「ウナギ文」における「対応關係」とな

る。小池（1994）は名詞述語文を4つに分類して、(56)がウナギ文であるとしている。

- | | | |
|----------------|-----------|---------|
| (53) ほくは山田太郎だ。 | ほく = 山田太郎 | 「同一関係」 |
| (54) ほくは日本人だ。 | ほく < 日本人 | 「包含関係」 |
| (55) 山は富士山だ。 | 山 > 富士山 | 「逆包含関係」 |
| (56) ほくは富士山だ。 | ほく → 富士山 | 「近接関係」 |

ウナギ文とその他の名詞述語文とはどのような関係にあるのであろうか。本稿では、名詞述語文という同一形式であるため、これらの文の意味構造には共通部分があり、様々な解釈は相対的な違いであるという立場で分析することにする。小池も述べているが、(53)は、通常は「同一関係」を表すが、「対応関係」を表すウナギ文としての解釈もあり得る。その場合は、次のような意味構造となる。

- | | | |
|----------------|-------------|--------|
| (57) ほくは山田太郎だ。 | ソース | →ターゲット |
| [主体→関連概念] | < 主体《関連概念》> | →関連概念 |

関連概念は、発話の場面によって様々な具体化される。例えば、「選挙で選ぶ候補者」、「犯人と考える人物」、「好きな俳優」等々である。名詞述語文の形式を持っていれば、ウナギ文としての解釈があり得ると言える。次に、小池が「逆包含関係」としている(58)を見てみよう。

- | | | |
|--------------------|---------|---------|
| (58) (=55) 山は富士山だ。 | 山 > 富士山 | 「逆包含関係」 |
|--------------------|---------|---------|

本稿では、この型も、ウナギ文とみなし(59)のような意味構造を持つと考えることにする。

- | | | |
|--------------|-------------|--------|
| (59) 山は富士山だ。 | ソース | →ターゲット |
| [主体→関連概念] | < 主体《関連概念》> | →関連概念 |

この型の関連概念は、「同類内で最も優れたもの」と具体化されると考えられる。関連概念がこれと似た「対象内で最も優れた部分（特質）」として具体化される(60)(61)は「逆包含関係」ではないが、ウナギ文である。

- (60) 春は曙。
 (61) 男は度胸、女は愛嬌。

(62)(63)の「同一関係」と、(64)の「包含関係」について見てみよう。

- | | | |
|---------------------|----------|--------|
| (62)(=53) ほくは山田太郎だ。 | ほく=山田太郎 | 「同一関係」 |
| (63) 東京は日本の首都だ。 | 東京=日本の首都 | 「同一関係」 |
| (64)(=54) ほくは日本人だ。 | ほく<日本人 | 「包含関係」 |

これらの文の主語と述部名詞との関係は「<主体《内包概念》>→内包概念」と考えることができる。この場合の「内包概念」とは、対象に本来的に備わって一体化している概念と考えることにする。これらの文とウナギ文の意味構造とを比較してみよう。

- | | ソース | →ターゲット |
|-----------------|-------------|--------|
| (65) ほくは山田太郎だ。 | 「<主体《内包概念》> | →名称」 |
| (66) 東京は日本の首都だ。 | 「<主体《内包概念》> | →地位」 |
| (67) ほくは日本人だ。 | 「<主体《内包概念》> | →所属範疇」 |
| (68) ほくはうなぎだ。 | 「<主体《関連概念》> | →関連概念」 |

(65)–(67)の場合、述語と直接関係するのは主体と一体化している「内包概念」である。他方「対応関係」の場合、述語と直接関係するのは主体が包含する「関連概念」である。述語が直接関係するのが主体の部分であるという点で名詞述語文は同じ意味構造を持ち、「同一関係」、「包含関係」、「対応関係」の違いは、主体がそれらの概念を予め内包するのか、新たに包含するのかという主体と概念との一体化の程度の違いの問題と考えられる。内包概念は主体との一体化度が強いいため、主体そのものとして捉えられる。他方、関連概念は主体に新たに包含されるものであり、両者の一体化度は弱く、関連概念が具体化されるのも言語外の文脈の助けが必要である。

6-3 文脈によって決まるウナギ文

本稿では、ウナギ文は「ソース→ターゲット」が「<主体《関連概念》>→関連概念」として示される「連結メトニミー」であるとして議論を進めて来た。関連概念が具体化されるのは個々の文脈においてである。(69)–(73)はウナギ文であるが、文脈によって具体化される関連概念の例を「 」内に示してみる。尚、例文の下線は筆者が付したものである。

- (69) 君はかわいい目だな。 「身体部分」
 (70) 英会話はやる気です。 「必要な特性」
 (71) あの顔色は不採用だった。 「示している内容」
 (72) 年をとっての親孝行はやっぱりお嬢さんね。 「行為の具現者」
 (73) 漱石は猫で、隼外は雁だ。 「扱った対象」
 (69)–(73)尾上 (1982))

7 西山 (2003) の反論に対して

西山 (2003) は、ウナギ文のメトニミーとしての分析に反論している。反論として5つの問題点「一般性の欠如」、「代名詞の照応」、「量化詞・数量詞の振る舞い」、「同一対象指示の名詞句による置換の許容性」、「ウナギ文の倒置可能性」を挙げている。紙幅の関係から、詳細な検討は別の機会に委ねることにして、「一般性の欠如」と「代名詞の照応」についてのみ見てみることにする。(74)のように「注文客→注文料理」のメトニミーが成立しても、(75)や(76)の文においては成立しない。このことから、西山はメトニミーとしてのウナギ文分析は一般性が欠如していると分析している。

- (74)(=21) ウェイター：ご注文はどういたしましょう？
 客A : 私はうな丼だ。
 客B : ぼくは天井だ。

- (75)(=18) ? ぼくはおいしい／高い。 「注文客→注文料理」
 (76) ? あの店員はぼくを運んでいる。 「注文客→注文料理」

西山がメトニミーと呼んでいる現象は、本稿で議論した「特徴づけメトニミー」であり「連結メトニミー」としての分析への反論となるわけではない。(75)(76)では、「ぼく」が「注文」を「部分」として包含し、機能的に一体化して「全体」として捉えられる「対象の拡張」が必要とされていないという点、更には連結メトニミーの意味の二重構造、つまり、(拡張された)対象「全体」に関する「稼働」、「状況」、「責任」、「述部名詞との対応関係」等の叙述が、発話の場面に必要とされていないという理由から連結メトニミーは成立しない。従って、西山の反論は成立しない。もう1点、代名詞の照応についての問題を見てみよう。(77)(a)で「注文客→注文料理」というメトニミーが成立しているならば、代

名詞は注文料理に合わせるべきだが、(77)(c)が不可となっていることが問題であると指摘している。

(77)(=19)(a)甲：花子さんが遅れてくるそうだが、彼女のために注文しておいてあげよう。花子さんは何だろう。天井かな。

「注文客→注文料理」

(b)乙：花子さん、ああ、彼女は、ウナギだよ。

(c)丙：？花子さん、ああ、それは、ウナギだよ。

しかし、5節で見た通り、連結メトニミーにおいては代名詞はソースと一致する。従って(77)(b)が正しい文であり反論は成立しない。

8 まとめ

本稿では「ウナギ文」について先行研究の分析の問題点を検討した上で、連結メトニミーとしての分析を提案した。「ウナギ文」の言語表現としての伝達内容は、「主語」と「述部名詞」との「対応関係」の叙述であるが、述語と直接関係するのは「関連概念」であるという意味の二重構造があり、この「関連概念」は文脈によって具体化される。これが、連結メトニミーとしての「ウナギ文」の認知メカニズムである。まとめとして、本稿の「連結メトニミー」による「ウナギ文」の説明によって解決する問題について、以下に5点列挙してみる。

A

基底文からの省略・変形によって、ウナギ文とは意味の異なる基底文を、ウナギ文と結びつけるという分析を取らない。

B

ウナギ文に対応する外国語が見つかることから、ウナギ文を日本語特有の現象として分析をしていない。

C

「名詞述語文」という同一形式を取る「同一関係」、「包含関係」を表す文と「ウナギ文」の共通の意味構造について説明できる。

D

「同一関係」、「包含関係」を表さない「名詞述語文」の分析のみに限定せず、同様に一見非論理的と見られる「AがBする」、「AをBする」のような文につ

いても説明できる。

E

他の連結メトニミーと同様に意味の二重構造を表すと考える場合、ウナギ文の言語表現としての伝達内容は「対応関係」の叙述であるため、複数の対応が想定される文脈で容認され易い言語事実に自然な説明ができる。

*本稿の執筆に当たっては、審査に当たられたお2人の先生から貴重なご助言を頂いた。この場を借りて謝意を表したい。尚、言うまでもなく、本稿の不備はすべて執筆者の責任である。

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学 言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店。
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』講談社。
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法 ーダとノー』くろしお出版。
- 尾上圭介 (1982) 『「ぼくはうなぎだ」の文はなぜ成り立つのか』『国文学—解釈と教材の研究』108-113. 学燈社。
- 川本茂雄 (1976) 「日本語の文法の特徴—視点の模索—」金田一春彦 (編) 『日本語講座第1巻・日本語の姿』大修館書店。
- 北原保雄 (1981) 『日本語の世界6 日本語の文法』中央公論社。
- 金田一春彦 (1955) 「日本語—文法」市川三喜 (他主幹) 『世界言語概説 下』研究社。
- 小池清治 (1994) 『現代日本語文法入門 (ちくま学芸文庫)』筑摩書房。
- 小島義郎 (1988) 『日本語の意味・英語の意味』南雲堂。
- 菅井三実 (2003) 「文法現象の換喩分析—客観主義的分析を超えて」『日本認知言語学会第4回大会 Conference Handbook』11-14. 日本認知言語学会。
- 高本條治 (1995) 『「ウナギ文」の語用論的分析(1)文脈における語彙統語構造の発展と拡張』『上越教育大学紀要 15-1.』123-136。
- 高本條治 (1996) 『「ウナギ文」の語用論的分析(2)文脈における語彙統語構造の発展と拡張』『上越教育大学紀要 15-2.』405-418。
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 ー指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房。
- 堀川昇 (1983) 『「僕はうなぎだ」型の文について—言葉の省略』『実践国文学

24.』57-71.

- 初山洋介 (1998) 「換喩 (メトニミー) と提喩 (シネクドキー) —諸説の整理・検討—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』6:59-81. 名古屋大学留学生センター.
- 初山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』No.1. 29-58. ひつじ書房.
- 森有正・中村雄二郎・川本茂雄 (1972) 「対談—ことばの世界 (上)」4-26『言語』4. 大修館書店.
- 森有正・中村雄二郎・川本茂雄 (1972) 「対談—ことばの世界 (下)」47-63『言語』5. 大修館書店.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版.
- Fauconnier, Gilles (1994) *Mental Spaces*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nunberg, G. (1995) "Transfers of Meaning." *Journal of Semantics* 12: 109-132.

